

困難でも。したたかに、

しなやかに、笑って生きる

羽生市立西中学校 佐藤 俊次

自分をだめにするまで、  
がんばってはいけない。

今年、わたしの大切な仲間が早期退職  
してしまいました。

若い頃から共に組合活動に取り組み、  
夜を徹して、ひまわり学校について議論  
したり、恋愛を論じたりし、30年間とも  
にたたかってきた仲間です。

学年が荒れて、管理的な教師や、「わ  
がまま」な生徒との交わりの中で傷つき、  
自分を責め、精神的に追い詰められた彼  
に一度ではなく、二度までも、わたしは、  
寄り添うことができなかった。

彼は何よりも授業を大切にし、非民主  
的な管理運営や筋の通らないことに対し  
て、いつも毅然と意見を述べ、たたかっ

ていました。

異動をして、定年前の最後の学校にな  
るはずだった彼は、突然、職場を去りま  
した。

退職した彼から、しばらくしてから、  
やめた理由を述べた手紙が組合に送られ  
てきたのです。この1年間の追い詰めら  
れていった自分の姿を赤裸々に綴ってあ  
りました。ストレスによる精神的病の再  
発の不安といつも向かい合い、子どもた  
ちとの関係がこわれないかという不安。  
でも、彼は、周りを責めたり、愚痴った  
りしていませんでした。一言も…。自分  
を責め続けていたんです。…痛恨の極み  
です。

『もっと不真面目で良かったのに。好  
きなことやって、組合活動をポカしても

良かったんだ。組合員であること、再発  
の不安とのたたかい、前任者の残した部  
活のめんどう…無理しなくて良かったん  
だ。もっと、愚痴を言ってくれて良かっ  
たんだ。苦しいときに、支えられない友  
だちってなんだよって。』わたしは今も  
思います。

### 若い教師と苦楽をともに

教師になって33年目。

中学3年生の学年主任、バスケット部  
の顧問。組合は、北埼玉支部書記長、単組  
執行委員長をつとめています。本来、わ  
がまま、協調性に乏しいわたしは、今  
でもあちこちで軋轢？を作り出しながら  
日々を楽しんでいます。そして、今、若  
い教師が増えています。どうつきあって

いくか、ですね。しかし、変にあわせようとするが無理があります。地味なかなど。たわいもないことで、日々を楽しむ。そして、苦しそうな時、つきあう。わたしは、酒を飲むのが好きです。わたしは、だいぶ前に、こどもの手本となる教師、率先垂範して模範を示す教師たんとすることをやめました。

若い体育の女性教師は、体育教師としての意地があるから、ふがない自分の学級を見て歯がゆくくやしい。わたしは、「コンクールでいつも1位は、1クラス。勝ったクラスは、何も言わなくてもいい。プロの真価が問われるのは、1位以外のクラスに何を語るか、ですよ。」「たよりないリーダーに変わって先生のクラスのあの子が先頭に立ち始めてるじゃないですか。あの子を起点に、あきらめなかつたという事実を彼らの前に語ってあげたいじゃないですか。それが、プロです。」と言って、そのクラスに応援にはいってました。

またこんなことも。事件を起こして、家裁送りになったクラスの子の審判に立ち会い、うちひしがれていた担任を飲みに誘いました。彼は、泣きながらいままでの自分を語りました。前任校で、生徒

とも教師ともぎすぎすした関係をひきずりボロボロになって異動してきたこと。やめそうになって、心を癒さなければ生きていけない状態だったこと。かつて亡くなったわたしの親友の教え子だったこと。臨時採用の彼は、ともすれば、同じ学年の担任からかわれキャラで笑ってはいましたが、実は必至に再生に向けて笑おうとしていたのでした。ペロペロになるまで飲みました。

## 理不尽さに立ち向かう

3年前。当時、とても管理的で、若い臨採の先生や新任をあごでこき使い、時間も考えずに呼びつけたりしていた管理職と、わたしは「熾烈な」たたかいをしてました。突然、だれにも相談せずにバドミントン部をつくる、数十万円かけて学校のユルキャラをつくる、全校自転車通学で、地域からの文句が多いと突然全員徒歩通学させたり…。わたしは、抗議のために、駅から4kmある学校まで徒歩通勤をしました。たまたま、その日、3・

11の大震災になって。悲惨でした。おかげで、ガソリンがないのかと心配した、男子バスケット部の息子から嘆願され

て、ガソリンスタンド経営の親が車にガソリンをいれてくれましたけど。学校は、いやな雰囲気。でも、楽しむ。

採用試験の前に励ましのメール。受かったら2次に向けての励まし。結果に対しては、受かったらおめでとう、落ちたら来年に向けての決起集会だ。いずれにしても飲む。若者が、現場をもちながら必至に勉強しているのなら、せいじっばい年寄りがはげましてやろうじゃないか。いつもけんか腰にあれしてこれしてと職員をしかりつける事務職。でも、受けて立つ。「もつと優しく言ってよ。」だらしのない学年のスタッフの身辺整理をわたしがやる。「これで、職員室歩けます？」と頭かきながら…。

前の職場で、心身ともに大変な思いをしてきた同世代の職員。こどもに年寄りっぽいと言われてしょげていた。「先生、あの子たち、わたしをバカにするんです。わたし、気が弱いので…」と言われて。「先生、わかったよ。共に、すてきに年寄りを生き抜こう。」とはげます。そう言ってるそばから、用足しに職員室を出たはずなのに、何しに出たか忘れて戻って、「また、忘れたんですか」と新任に言わ

れる始末。笑うしかないでしょう。

## 教師として 実践にこだわる

だからこそ、日々の教員人生は、楽しいものであるべきだとわたしは、思っています。

笑ってたかう。でも、決してひかない。でも、日々の生活は、わたしたちの人生そのものだから、彼らごときのために、わたしたちがいやな思いをする必要はないと…。

「餃子せんべい」は、袋をあけると強烈なにんにくの香りが職員室じゅうに漂う。思わず、「えへへっ」と。みんなに配る。みんなも「おいしい」といわざるをえない…。

つい先日、右目上まぶたを8針縫いました。きずがぱっくりあいて、血だらけです。

バスケット部の練習中に生徒の頭が右目を直撃したのです。いつも、70歳になってもバスパンはいてバスケットやるぞって言ってます。やせがまんは大事ですよ。

病院へ若い臨探の先生が運んでくれました。手術が無事終わり、待合室に戻ったら、彼がいきなり、「先生、酒飲んでも平気か聞いた方がいいですよ」と。笑っちゃいます。

## 人間的な交わりを楽しむ

わたしは、55歳にしてバスケット部の顧問。まだ、こどもたちとゲームをします。技術をやってみせる。怒鳴る、いすを蹴ることもある、ちよっただけ。異動して2年目。「先生、今日もまぶしいですね。」とわたしの頭を触る、髪の毛をぬく。かわいいわたしの教え子たち。なによりも、逃げずに立ち向かうブレースタイルを貫いている。子どもたちは必至についてくる。いつしか、逃げ回るチームが攻めるチームに。そのバスケットマンたちは、問題を持っている子のいるクラスの中でも、ピリピリした雰囲気をおこわして、わたしとたわむれる。平気でにんじんだらけの肉じゃがを配膳し、教卓のまわりに集まり、食べたかどうかをチェックする彼ら。問題の彼は、その教師と生徒の関係がうらやましい。すこしだけ距離が縮まるのを感じる。子ども

たちとの人間的な交わりを、わたしは楽しむ。いやな面だけ見ている、毎日がつまらない。

わたしに挑んでくる若者がいる。新任以来4年目。理科。わたしは、社会。有能な男であるが、だらしがない。身辺整理をしない。がははっと自分を笑い飛ばす。旅が大好き。なぜかうまがあう。彼は、「わたしは原発賛成ですから。」「オスプレイ配置賛成ですから」と。でも、彼は、もしか教師ではない。わたしが、昨年来震災ボランティアに行ったり、原発フィールドワークに行ったりすると、彼も、福島原発現地を踏査する。先日、彼の担任するクラスで、公民の授業の導入で、現代の課題について、賛成・反対を生徒全員が意思表示するという授業をした時、彼を授業に呼んで意思表示してもらったら、「原発反対」とクラス40名全員意思表示したあとに、担任は、「賛成」にマグネットを置いたら、「えっ？」と生徒が啞然としたぶっインクをおつけた。「そう、同じ土俵で担任と議論しよう。それが、デモクラシーだな。」と笑って終えた。

日々、深刻な問題がないことはない。

しかし、だからこそ、豊かに、深く交わりたいと思う。管理的な担任に汲汲としている子と笑いあう。「だいじょうぶ。人間捨てたもんじゃないよ」と心でつぶやきながら。

## 組合員の真価 —弱い立場の人に寄り添う

「職場で、一番弱い立場にいる人に寄り添うことができるか、が組合の真価だ」と、という言葉は、いつもどんな時でも、わたしの心をとらえて離さない。

不器用で無口だったわたしは、実践を通じて、「話し方」を学んだし、資料の「読み方」、授業のスキルを学んだ。しかし、大切なのは、「何を伝えるのか」という問いであることを信じて疑わない。

子どもたちが、涙する教材がいつばいある。怒りに震えるときがある。

北埼玉支部では、社会科勉強会を毎月やっている。去年、組合に加入して勉強会の運営をしてきている30代前半の彼は、「先生の授業を継承します。組合に入る時は、悩みました。でも、教壇に立って恥ずかしくない自分でありたいと思

えた時、腹が決まりました。」と言われた時、うれしくて涙が出そうになった。彼は、組合に入る前、何回か、年休をとってわたしの授業を見に来た。そう、これがわたしの使命なのだと思った。

彼が結婚し、子育てに、そして、担任の仕事に悪戦苦闘している時。秩父事件、足尾鉍毒事件、原発とマイカーに未組合員と一緒にフィールドワークを実施した。

仲間が、どんなに大切か。

支部でも、かなり強引な提案を支部の仲間たちは受け止めて議論してきた。そう、わたしは、いつでも大切な仲間を支えられてきた。今も、子育て中で忙しくても、たいへんなやりくりをして参加している仲間がいる。だからこそ、震災ボランティアも企画運営できたし、大成功をおさめられた。3回目も準備が始まっている。

情勢は、厳しい。だからと言って、わたしたちの人生が厳しいとは限らない。震災ボランティアに、参加したわたしの生徒たち。毎月の9の日宣伝行動に来て、一緒にティッシュを配る青年たち。捨てたものではありません。ぼちぼちがんば

りましょうよ、皆さん。

